

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01390

研究課題名(和文)MDG5達成に向けたアジアのマタニティ政策の検証-脱医療化とポジティブな出産経験

研究課題名(英文)Evaluation of Maternity Policies to achieve MDG5: Demedicalization and Positive Birth Experience

研究代表者

松岡 悦子(Matsuoka, Etsuko)

奈良女子大学・アジア・ジェンダー文化学研究センター・協力研究員

研究者番号：10183948

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,000,000円

研究成果の概要(和文)：バングラデシュのマダリプル県ラジョール郡の村の母子保健に焦点を当てた研究を行った。女性の健康は、女性の生活全般と密接に関係していることから、児童婚の状況、マイクロクレジットの利用、女性の空間移動についても調査した。MDGsによって施設分娩が進められた結果、調査村の施設分娩率は67%、帝王切開率は60%となっている(2021年)。その結果、子どもへの母乳哺育率は低下し、女性の産後の体の不調が増えており、女性の健康にとって望ましくない状況が生じている。その背景には、海外出稼ぎによる送金の増加で村が豊かになり、私立病院が乱立したために、医学的には不必要な帝王切開が増加していることがある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

MDGsと後続のSDGsは人類に共通の目標を掲げているが、それが個々の文化でどのような形で現れるかについては、文化人類学的な調査が必要である。グローバルヘルスの分野で一般的に主張されていることが、ある文化のなかで生きる人々に与える影響については、その文化の視点から見た調査が必要である。施設分娩が出産の安全性に寄与し、女性の健康の改善に寄与するためには、施設分娩の質が高められなくてはならない。また、政府による私立病院の規制や、女性の側の教育レベルの向上、NGOのヘルスワーカーによる支援も重要である。学術的意義としては、グローバルヘルスを個々の文化に視点を置いて見る重要性を明らかにしたことである。

研究成果の概要(英文)：A study focusing on maternal and child health in villages in Rajoir District, Madaripur District, Bangladesh, was conducted. Given the close relationship between women's health and their overall lives, the study also investigated the situation of child marriage, the use of microcredit, and women's mobility. As a result of the promotion of facility-based deliveries by MDGs, the facility-based delivery rate in the surveyed village is 67%, and the cesarean section rate is 60% (2021). Consequently, the rate of breastfeeding among children has decreased, and there is an increase in postpartum health problems among women, leading to undesirable conditions for women's health. This is partly attributed to an increase in remittances from overseas labor migration, which has enriched the village, and the proliferation of private hospitals, leading to an increase in medically unnecessary cesarean sections.

研究分野：文化人類学

キーワード：母子保健 女性の健康 妊娠・出産 バングラデシュ 医療化 NGOs グローバルヘルス

## 1. 研究開始当初の背景

中低所得国における妊産婦死亡率は、高所得国と比べて非常に高いことから、妊産婦死亡率は世界の中にある健康格差や経済格差、ジェンダー不平等を表す重要な指標とされてきた。MDGs (ミレニアム開発目標) の目標5は、2015年までに各国が妊産婦死亡率を1990年のときの数値の4分の1にすることをめざしていた。このような背景の中で、アジアの国々は目標を達成するために競ってさまざまな政策をとり、出産を近代的な形に変えようと努めていた。しかし、MDGsの目標値の達成を急ぐあまりに、現実の妊娠・出産・産後がどのような状況になっているのかが忘れ去られているのではないかという疑問が、本研究の出発点である。MDGsの目標である妊産婦死亡率の低減自体は望ましいことであるが、それが現実の女性の出産経験をどのように変え、また母子の健康にどのような影響を与えているのかを、文化人類学的に微細に、現地の文化に即して見ていく必要があると思われた。

## 2. 研究の目的

本研究は、インドネシア、ラオス、バングラデシュを例にとり、MDGsの期間に取られたマタニティ政策とリプロダクティブ・ヘルスに関連する指標(妊産婦死亡率、帝王切開率、専門家による介助率、施設分娩率など)を比較し、どのような政策が女性の健康を改善することになるのかを検討しようとするものである。MDGsやその後のSDGsにおいて、妊産婦死亡率を下げようとする中で女性のリプロダクションがどのように変化したのかを文化人類学的に調査し、女性がポジティブな出産経験をするには何が必要かを考察する。また、女性を取り巻く生活がどのように変化しつつあるのか、あるいは変化が見られないのかを、女性の空間移動、経済生活、結婚の視点から合わせて考察する。

## 3. 研究の方法

### (1) 当初の研究計画

本研究では、嶋澤恭子がラオスを担当し、松岡がインドネシアを、そしてバングラデシュを全員で担当する予定であった。その際に、2つの立場の人たちに調査を行うことを計画していた。1つは、マタニティ政策を立案する政策担当者や政策の研究者、2つ目は、調査地の村の出産介助者やNGOsのヘルスワーカー、また村の人たちである。ところが、2020年2月からのコロナ禍でそれ以降の現地調査が不可能となったため、全員でバングラデシュ1か国に絞って研究を進めることとした。バングラデシュでは、以前の科研において調査地としていたマダリプル県ラジョール郡の村を継続的に調査することとした。この地域は、NGOのGono Unnayan Prochesta (GUP)が独立直後の1973年から活動しており、松岡が1990年代から継続的に調査を行っているため、コロナ禍においても彼らの協力を得ることができると考えたからだった。

### (2) 研究方法と研究内容

バングラデシュは、2015年までに妊産婦死亡率を143(出生10万対)に減らすことを目標にし、施設分娩での出産と、TBA(伝統的出産介助者)ではなく、SBA(専門的な教育を受けた出産介助者)による出産を増加させようとしていた。

コロナ禍が始まる前の2019年度にはバングラデシュに2回現地調査に行き、政策担当者と村の出産介助者の両方にインタビューを行った。しかし2020年度以降の現地調査が不可能になったため、代わって以下のことを行った。

- ① コロナによる影響について、バングラデシュとインドネシアの研究者を招いてズームによるシンポジウムを行った(2020年11月、2021年2月)。
- ② 2021年の1月～12月の1年間に、2つの村で出産した女性たちに、訪問による質問紙調査を行った。この質問紙では、女性の年齢、学歴などの属性に加えて、妊娠・出産の場所、介助者、赤ん坊の哺育方法、出産の費用の捻出方法、女性の日常の空間移動、コロナ禍による移動の変化、妊娠から産後にかけての薬の使用、産後の女性の健康、出産の儀礼について質問した。この調査は、コロナ禍においてもマスクや消毒を厳重にして、村内を行き来しているGUPのワーカーに依頼して行ってもらった。
- ③ 児童婚について若者の考えを知るために、40人の若者に2回に分けて、20人ずつのワークショップを2つの村で行った。ファシリテーターをGUPの関係者に依頼した(2021年12月)。

## 4. 研究成果

### (1) オンラインのシンポジウム

#### ① The Impact of Covid-19 in Bangladesh and in Japan

バングラデシュでは、Holidayという名目でロックダウンが行われ、学校の閉鎖が長期にわ

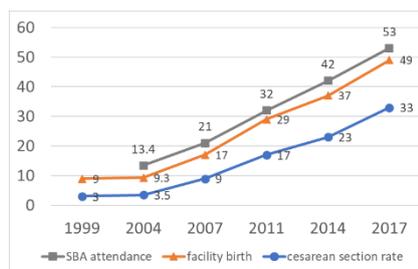


図1. 出産介助者、施設分娩率、帝王切開率の推移、出所 BDHS

たって続けられた。その結果、学校に行かずに結婚してしまう女子が増え、児童婚の増加が問題となった。マスクの習慣がなかったため、マスクをすることに人々は慣れなかった。また、コロナが社会のさまざまな分野での格差を広げつつあるという指摘がなされた。



② “The Societal Impact of COVID-19 in Indonesia and Japan”

インドネシアでは、コロナによって家族計画、予防接種、妊婦健診などのサービスが途絶え、受給者が大きく減ったことで、母子保健に大きな影響が見られた。また、コロナに罹った人は、身体的負担よりも社会的にスティグマを負わされる負担を大きく感じていた。

(2) 2021年の産後の女性への質問紙調査

① 調査方法と結果

ラジョール郡の2つの村（カリア村とラジョール村）の、合計626人の出産直後の女性の家を訪問し、女性たちに質問紙調査を実施した。

② 626人の産後の女性の属性

年齢：15-42歳 平均年齢 24.6歳

末子の年齢：生後1日～142日 平均 26.8日

教育年数：8.5年（妻）、7.9年（夫）妻の教育年数の方が、近年は長くなっている。

海外出稼ぎに出ている世帯の割合：約10%（コロナで帰国したためか少ない）

18歳未満の児童婚の割合：40%

③ リプロダクションに関する結果

今回の調査では、女性が予定していた出産の場所や介助者と、現実の出産場所や介助者の間に乖離があるかを見ようとした（図2）。

これによると、女性の62%は自宅で産みたいと考えていたが、実際には67%が病院での出産になっていた。また、介助者については、医師を予定していた女性は39%だったが、実際には67%近くが医師による介助となっていた。

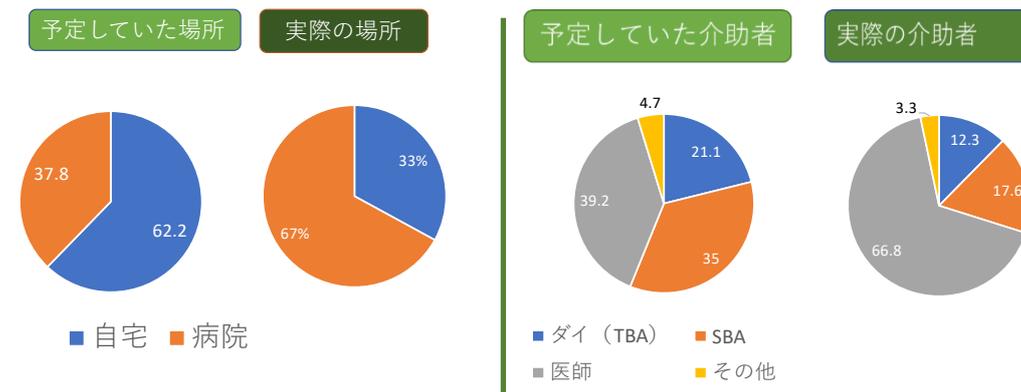


図2. 予定していた出産と実際の出産

さらに、626人全体に占める帝王切開の割合は60%であったが、病院で産んだ人だけをとると、その割合は90%となっていた。このことは、病院に行くとほぼすべてが帝王切開になることを意味しており、医学的に不必要な帝王切開が行われていることが示唆された。では、女性たちが帝王切開を望んでいるのかと言うと、女性たちへのインタビュー結果は以下のものであり、女性たちが帝王切開を望んでいないことが明らかだった。

「帝王切開をしたい人はいません。普通に産めば重い物も持てるし、家事もできるのに、帝王切開をしたら回復するのに半年もかかります」

「帝王切開をして、薬も買わなければならないのは、私らのような貧しい人には大変です。子どもを産むのに経済的に大変な思いをすることになります。夫はいくらかかったかきちんとメモを取っています」

「帝王切開をすると、問題がたくさん生じます。手術痕が痛むし、産後3か月間は歩いたり動いたりできません。下から産めばそんなことはないのに。普通に産んだら2日間で回復します」

女性たちが帝王切開を望んでいないのに、帝王切開が増加している背後にはいくつかの要因があった。まず一つは私立病院が2007年に初めてこの地域に設立されてから毎年のように増加し、2021年には10か所の私立病院が患者をめぐって競合する状態となっていた

(表 1)。このような私立病院の増加を支えていたのは、この地域から海外出稼ぎに行く男性が 2007 年から増え、海外からの送金がこの地域を潤すようになったことだった。病院は、さまざまな理由を持ち出して帝王切開の方が安全だと勧め、女性たちがそれに従う様子が見られた。

また、村のヘルスワーカーも国が施設分娩を推奨していることから病院での出産を勧め、結果的に帝王切開による出産を増やすことになっていた。

#### ④ 施設分娩と帝王切開が母子の健康に与える影響

帝王切開によって女性の身体の回復が遅れることを多くの女性が指摘していたが、子どもの健康にも大きな影響を与えることが示唆された。それは、女性が授乳を難しく感じるようになってきているからだ。図 3 にあるように、出産場所と授乳方法の関係をみると、自宅で産んだ場合には母乳のみで育てる割合が病院で産んだ場合と比べて有意に高くなっている。バングラデシュ村落においては、清潔な水を手に入れることが難しいことを考えると、母乳で育てることは子どもの健康にとって非常に重要である。その点からも、施設分娩の増加が子どもの健康に良い影響を与えているとは言い難い。

#### ⑤ 出産と経済的負担

女性たちが出産に支払った費用は、自宅分娩の平均が 2,328 タカであるのに対して、帝王切開の場合の平均は 21,464 タカだった。また、出産の後に名づけやその他の儀礼をする習慣があるが、今回の出産で儀礼を行わなかった人の割合は 6 割以上に上った。その理由の第一が、経済的な困難であり、2 番目はコロナ禍、3 番目が夫の海外出稼ぎであり、夫が帰国したら行こうとした人もいた。

#### ⑥ 空間移動について

女性と男性の 1 日の行動圏を GPS を用いて測定した。男性と女性とで屋敷地の外に出ている時間を比較したところ、男性は 407 分、女性は 97 分と大きな差があった。女性は自宅からバスやオートを利用して 1-2 時間で行ける範囲に実家があることが多く、月に 2 度ほど実家に帰っていた。また、質問紙調査を行った 2021 年はちょうどコロナの最中であつたため、コロナ前とコロナが始まって以降の移動回数を比較したところ、男女ともに市場、病院への訪問頻度は大きく減少していたが、男性の方が女性よりも減少幅が大きく、コロナの影響を強く受けたことがわかった。近代化に伴って、女性の行動圏にも変化があるのではないかと予想したが、女性の行動範囲は依然として屋敷地を中心に成り立っていることがわかった。

#### ⑦ マイクロクレジット

マイクロクレジットは、女性に小口の融資を行い、女性がそれを元手に **income generating activity (IGA)** を行って経済的に自立し、貧困から脱却することを目的としている。だが同時に、NGOs にとってはマイクロクレジットの金利が収入源になっている。マイクロクレジットでお金を借りた女性たちにとって、マイクロクレジットが女性のエンパワメントの機会になっているかを尋ねたところ、ほとんどの女性がマイクロクレジットの利用によって生活が向上したと感じていたが、定期的な返済が負担だと答えた人もいた。また、マイクロクレジットで借りたお金は、女性が IGA を始めるための資金とされているが、現実には家庭の生活レベルを上げるための支出に使われたり、夫の仕事の資金に使われたりすることも多く見られた。

#### ⑧ 薬の使用

バングラデシュでは、公的な施設である **Union Health and Family Welfare Centre** やコミュニティ・クリニックにおいて、ビタミンや鉄剤などの基本的な近代医療の薬を無料でもらうことができる。公的な施設以外にも、人々は村医者（医師免許がないが、近代医療の薬を出し、治療を行う）や薬店（薬剤師がいるとは限らないので、薬店の言葉を用いる）で薬を簡単に購入することができる。2021 年の質問紙調査では、妊娠中に薬を服用したのは 626 人のうちの 84% で、その多くは妊娠に伴う胃腸の不快感を解消するために、薬店や公的な病院で胃腸薬を手に入れていた。女性たちは病院や薬店以外にも、巡回しているヘルスワーカーや、村医者、伝統的な薬草治療者、出産介助者などのさまざまな職種の人々から多様な薬を手に入れている実態が明らかになった。

### (3) 児童婚をめぐるワークショップ

#### ① バングラデシュの児童婚をめぐる状況

バングラデシュ全体では、児童婚（カップルのいずれかが 18 歳未満の結婚）の割合は

表 1.私立病院の設立年とその年の病院数

設立年	病院数
2007	2
2009	3
2011	4
2012	5
2013	6
2014	7
2015	8
2018	9
2021	10

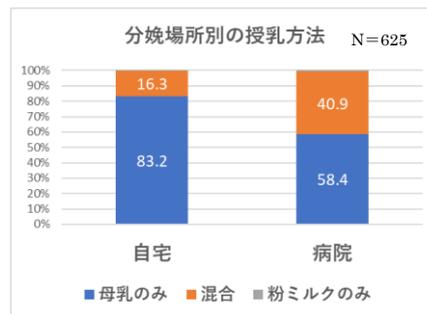


図 3.分娩場所と授乳方法の関係

51%で、アジアでは最も高率とされている。今回の調査では、親が決めて娘を結婚させる場合よりも、子どもたちどうしが知り合って結婚を決める場合が多くなっていった。また、コロナ禍によってバングラデシュ全体で児童婚の増加がみられることがメディアで明らかにされており、18か月間にも及ぶ学校の閉鎖が児童婚の増加を招いたとされている。その背後には、親がコロナ禍で職を失うなどの経済的困難に陥ったことや、子どもたちの行き場がなくなり、携帯やSNSで男女が連絡を取り合ううちに恋愛関係に至ること、また災害や感染症などの危機的な状況において、親は娘を結婚させて早く安全な環境を与えようとするところがある。

② ラジョール村とカリア村での児童婚をめぐるワークショップ

ラジョール村では、10年生の女子20名、カリア村では16歳～26歳の未婚の男女10名ずつの、2つの村を合わせて40名に対して、ワークショップを開いた。

「結婚相手をどのようにして見つけたいか」という質問に対して、8割は「親の決めた相手と結婚したい」と答えたが、その中身は様ではなく、親が十分に吟味して選んだ相手と結婚したいという考えもあれば、自分で決めた相手を親に最終的に承認してもらおうという意見まで幅があった。いずれの場合にも、最終的には親が決めた相手と結婚したことになり、親の社会的な対面が保てることになる。また、教育については、男女全員が高校以上の学歴を希望し、高い地位の職業に就きたいと語っていた。さらに、身近な人の中に児童婚の経験者がいるかという質問には、8割がいると答え、いずれのケースも幸せな結果になっていないという答えだった。若い世代の男女は、結婚よりも高い教育を受けることを重視しており、また親が決めたという形を取りつつ、実際には恋愛結婚が増えていることを考えると、女性の意思の入らない婚姻は、今後減少していくと思われた。

結論

MDGsでは、妊産婦死亡率を下げるために、施設分娩と専門的な教育を受けた人による介助を勧めていた。しかし多くの中低所得国で、施設分娩の増加が帝王切開の増加を招き、産後の女性の回復を遅らせ、授乳を難しくしている状況が見られる。また、一度帝王切開をすると、その後もずっと帝王切開になることから、バングラデシュのような児童婚が半数を占める地域では、初産での帝王切開は、その後の出産すべてにおいて反復帝王切開が行われ、出産のリスクを高めることになっている。施設分娩が真に妊産婦死亡率を下げるようになるためには、施設分娩の中身を改善し、質を向上させる必要がある。また、国は私立病院の乱立を規制し、医学的に不必要な帝王切開を押しとどめることが必要だろう。

表2.リプロダクションの指標

	妊産婦死亡率 2015(出生10万対)	帝王切開率 2017 (%)	施設分娩率 2017 (%)
バングラデシュ	176	33	49
インドネシア	126	18.5	79.4
ラオス	197	5.8	64.5

表2は、バングラデシュ、インドネシア、ラオスの妊産婦死亡率、帝王切開率、施設分娩率を比較したものである。これを見ると、施設分娩率が高くなると、妊産婦死亡率が下がるとは言えない。また帝王切開率は、ラオスが最も低く、バングラデシュが最も高い。

そしてインドネシアは、施設分娩率が高いにもかかわらず、帝王切開率は18.5%とそれほど高くはない。この理由として考えられるのは、インドネシアは1989年から1つの村に1人の助産師を配置する政策をとった結果、助産師が地域に密着して妊婦健診と正常な出産を担当する状況を作り上げてきたことである。現実には、助産師が妊産婦のケアを担当することで帝王切開を抑制し、正常な出産を増やす可能性が公衆衛生の分野で期待されているが、インドネシアの例からも、助産師の養成による帝王切開の抑制について、今後検証される必要がある。バングラデシュのように、免許を持つ助産師がこれまで存在しなかった地域と、インドネシアのように政策的に助産師を養成してきた国の比較から、助産師の重要性を検討する必要がある。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Haruhisa Asada	4. 巻 58
2. 論文標題 Post-flood relief and agricultural development in Bangladesh	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Geographical Reports of Tokyo Metropolitan University	6. 最初と最後の頁 9-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Etsuko Matsuoka	4. 巻 7
2. 論文標題 Is Healthcare a Right or an Obligation: An Exploration of Medicalization of Childbirth in Rural Bangladesh and in Japan ISSN 2432-9525	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Gender and Culture in Asia	6. 最初と最後の頁 25-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 五味麻美, 大田えりか	4. 巻 37(1)
2. 論文標題 日本の産科医療施設で出産したムスリム外国人女性の妊娠・出産経験に関する質的研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本助産学会誌	6. 最初と最後の頁 59-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3418/jjam.jjam-2022-0027	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 青木美紗	4. 巻 39
2. 論文標題 マイクロファイナンス事業の拡大に伴うNGO利用者の認識変化に関する研究 バングラデシュにおける複合的な生活支援に携わるNGOに着目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 協同組合研究. 2019. 39. 392. 46-56	6. 最初と最後の頁 46-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計43件（うち招待講演 16件 / うち国際学会 27件）

1. 発表者名 阿部奈緒美
2. 発表標題 Changes of TBA 's Role in Bangladesh
3. 学会等名 臺灣醫療人類學學會年會（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 五味麻美
2. 発表標題 Marriage and Reproductive Life Planning for women in Asia: A Case Study of Bangladesh
3. 学会等名 臺灣醫療人類學學會年會（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松岡悦子
2. 発表標題 Becoming a mother in Asia under the wave of global health.
3. 学会等名 臺灣醫療人類學學會年會（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松岡悦子
2. 発表標題 Policies aimed at achieving the Goals of MDGs/SDGs and their Effects on Women 's Experiences of Childbirth in Rural Bangladesh
3. 学会等名 “Reproductive Justice in a (Post-) Covid World: transnational Protest and Resistance” Reproductive Justice Research Network（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松岡悦子
2. 発表標題 痛みに意味はあるのか？文化とフェミニズムの視点から
3. 学会等名 第37回日本助産学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松岡悦子
2. 発表標題 世界の出産：所変われば品変わる、でも変わらないものは？
3. 学会等名 第39回日本分娩研究会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松岡悦子
2. 発表標題 Strategies for creating a healthy natural birth and happy parenting culture
3. 学会等名 大韓助産協会主催フォーラム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 嶋澤恭子
2. 発表標題 The relationship between the actual situation of postpartum care in Laos and the “Risk”
3. 学会等名 臺灣醫療人類學學會年會（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 諸昭喜
2. 発表標題 Medicine in the Gray Zone: The Pharmaceuticalization of Pregnancy
3. 学会等名 臺灣醫療人類學學會年會 (國際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 曾ケイエ
2. 発表標題 再也不簡單的哺育實踐：探討分娩醫療介入
3. 学会等名 臺灣醫療人類學學會年會 (國際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Etsuko Matsuoka
2. 発表標題 Impact of MDGs on Reproductive Health of Women in Rural Bangladesh. Croatia.
3. 学会等名 IUAES 2020, (國際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松岡悦子
2. 発表標題 Bangladesh 村落の女性のリプロダクティブ・ヘルス
3. 学会等名 国際ジェンダー学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Etsuko Matsuoka
2. 発表標題 Reconsidering Healthcare for Women in Rural Bangladesh and in Japan: Rights or Obligation?
3. 学会等名 国際シンポジウム「アジアの社会におけるヘルスケアの現在 子どもから高齢期まで（招待講演）（国際学会）」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Sharon Hanley
2. 発表標題 Covid-19: The situation in Japan.
3. 学会等名 Seminar: The Impact of Covid-19 in Japan and Bangladesh（招待講演）（国際学会）」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Haruhisa Asada
2. 発表標題 Impact of Covid-19 pandemic on socio-economic activities in Japan
3. 学会等名 International Webinar on Impact of Covid-19 pandemic on socio-economic activities with special reference to Japan and India（招待講演）（国際学会）」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Jun Matsumoto and Haruhisa Asada
2. 発表標題 Highland-lowland interaction in the Ganges-Brahmaputra-Meghna River Basin: Floods and rice production
3. 学会等名 IGU India International Conference on Global to Local Sustainability & Future Earth（招待講演）（国際学会）」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Jun Matsumoto, Haruhisa Asada, Azusa Fukushima, and Hironari Kanamori
2. 発表標題 Rainfall variations, floods and their effects on rice production in the Ganges-Brahmaputra River Basin
3. 学会等名 International Webinar on Climate Change, Geo-hazards and Sustainable Development (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Sharon Hanley
2. 発表標題 The impact of Covid-19 on society in Japan
3. 学会等名 The societal Impact of Covid-19 in Japan and Indonesia (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Che Sohee
2. 発表標題 Perspectives on health, though Covid-19 Pandemic in Japan
3. 学会等名 2021 Annual Meeting of Anthropology of Japan in Japan
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 青木美紗
2. 発表標題 Bangladeshにおける経済状況と出産に関する一考察 - 地域NGOが活動するKhalia村とRajor村を事例に
3. 学会等名 日本家政学会関西支部第43回
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 嶋澤恭子
2. 発表標題 大学院教育における「国際助産活動論」の実際：ラオスをフィールドとして
3. 学会等名 第35回日本助産学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Jun Matsumoto and Haruhisa Asada
2. 発表標題 The rice agriculture development and severe flood history since the late 20th century in Bangladesh
3. 学会等名 The Sixth Biennial Conference of East Asian Environmental History (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Haruhisa Asada, Takahiro Sato, and Kamal Vatta
2. 発表標題 Regional characteristics of rice-wheat cropping system and stubble burning in Punjab
3. 学会等名 Aakash Workshop (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Mami GOMI, Yasuhito KINOSHITA, Erika OTA
2. 発表標題 Building a Culturally Appropriate Maternity Care Model for Muslim Women in Japan
3. 学会等名 ICN International Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Mami GOMI, Yasuhito KINOSHITA, Erika OTA
2. 発表標題 The process by which foreign residents in Japan form a culturally appropriate condition during pregnancy and childbirth: Case of Muslim women
3. 学会等名 ICN International Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 諸昭喜
2. 発表標題 バングラデシュ農村部における女性の薬の使用
3. 学会等名 国際ジェンダー学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 曾 璟蕙
2. 発表標題 母乳か粉ミルクか：バングラデシュ村落の事例から
3. 学会等名 奈良女子大学・ジェンダー・レクチャーシリーズ第1回（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 五味麻美
2. 発表標題 Culturally Appropriate Maternity Care (文化的に適切な助産ケア) の概念分析
3. 学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松岡悦子
2. 発表標題 「母乳をめぐる歴史と文化」第115回
3. 学会等名 第115回 日本精神神経学会学術総会 委員会シンポジウム17 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松岡悦子
2. 発表標題 MDG5の達成とリプロダクティブ・ヘルス－インドネシアの事例から立教大学
3. 学会等名 国際ジェンダー学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松岡悦子
2. 発表標題 「バングラデシュ農村におけるリプロダクションの変容と女性の健康」
3. 学会等名 家族社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松岡悦子
2. 発表標題 Impact of Reproductive Health Policies on Women ' s Health: MDG 5 and BPJS.
3. 学会等名 Gadjah Mada University PSKK (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松岡悦子
2. 発表標題 バングラデシュ農村における妊娠・出産経験の変容
3. 学会等名 第34回国際保健医療学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 五味麻美
2. 発表標題 Child marriage in rural Bangladesh: A Mixed method study -Toward improving for women's health and empowerment-
3. 学会等名 ICN International Conference 2019 (Singapore) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 五味麻美
2. 発表標題 Effectiveness of culturally-appropriate maternity care: A Systematic Review of randomized controlled trials
3. 学会等名 ICN International Conference 2019 (Singapore) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松岡悦子
2. 発表標題 Impact of MDGs on Reproductive Health of Women in Rural Bangladesh. online.
3. 学会等名 IUAES 2020, Croatia. 実際にはzoom 12th March, 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 浅田晴久
2. 発表標題 Impact of Covid-19 pandemic on socio-economic activities in Japan
3. 学会等名 International Webinar on Impact of Covid-19 pandemic on socio-economic activities with special reference to Japan and India, (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Sharon Hanley
2. 発表標題 Sharon Hanley, Covid-19: The situation in Japan.
3. 学会等名 The Impact of Covid-19 in Japan and Bangladesh (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Sharon Hanley
2. 発表標題 The impact of Covid-19 on society in Japan.
3. 学会等名 The societal Impact of Covid-19 in Japan and Indonesia. (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 青木美紗
2. 発表標題 バングラデシュにおける経済状況と出産に関する一考察-地域NGOが活動するKhalia村とRajor村を事例に-
3. 学会等名 日本家政学会関西支部第43回研究発表会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 嶋澤恭子
2. 発表標題 大学院教育における「国際助産活動論」の実際：ラオスをフィールドとして
3. 学会等名 第35回日本助産学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Nurul Islam Biplob & Etsuko Matsuoka
2. 発表標題 COVID-19 Pandemic and an Increase of Early Marriage in Bangladesh
3. 学会等名 A comparative Study on Cultural Immune Systems, National Museum of Ethnology. (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 Misa Aoki	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Springer Nature Singapore, (Ed) Amita Singh	5. 総ページ数 2400
3. 書名 International Handbook of Disaster Research	

1. 著者名 松岡悦子、青木美紗、浅田晴久、阿部奈緒美、五味麻美、嶋澤恭子、曾ケイエ、諸昭喜	4. 発行年 2024年
2. 出版社 風響社、松岡悦子(編)	5. 総ページ数 375
3. 書名 バングラデシュ農村を生きるー女性、NGO、グローバルヘルス	

1. 著者名 Haruhisa Asada	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Springer, Anup Saikia and Pankaj Thapa (Eds.)	5. 総ページ数 241
3. 書名 Environmental Change in South Asia: Essays in Honor of Mohammed Taher	

1. 著者名 Haruhisa Asada	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Shinohara Printing Co.,Ltd., (eds.) Nityananda Deka, Haruhisa Asada and Yusuke Yamane	5. 総ページ数 63
3. 書名 Rural Livelihoods and Environmental Changes in Muktapur Village: People's Voice	

1. 著者名 白井千晶 (編著) 姚毅、洪賢秀、松尾瑞穂、嶋澤恭子、松岡悦子、幅崎麻紀子、田間泰子、澤田佳世、小浜正子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 247
3. 書名 アジアの出産とテクノロジー：リプロダクションの最前線	

1. 著者名 松岡悦子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 364
3. 書名 『サブスタンスの人類学』松尾瑞穂編	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	浅田 晴久 (Asada Haruhisa)  (20713051)	奈良女子大学・人文科学系・准教授  (14602)	
研究分担者	阿部 奈緒美 (Abe Naomi)  (20848460)	奈良女子大学・アジア・ジェンダー文化学研究センター・協力研究員  (14602)	
研究分担者	曾 ケイエ (Sou Keie)  (30848552)	奈良女子大学・アジア・ジェンダー文化学研究センター・特任助教  (14602)	
研究分担者	青木 美紗 (Aoki Misa)  (50721594)	奈良女子大学・生活環境科学系・講師  (14602)	
研究分担者	五味 麻美 (Gomi Mami)  (70510246)	川崎市立看護短期大学・その他部局等・講師  (42729)	
研究分担者	Hanley Sharon (Hanley Sharon)  (80529412)	北海道大学・医学研究院・特任講師  (10101)	
研究分担者	諸 昭喜 (Che Sohee)  (80848359)	国立民族学博物館・グローバル現象研究部・助教  (64401)	
研究分担者	嶋澤 恭子 (Shimazawa Kyoko)  (90381920)	大手前大学・国際看護学部・教授  (34503)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	モハマッド イスラム ヌルル  (MD Islam Nurul)		

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 The Impact of Covid-19 in Japan and Bangladesh, Nov 24, 2020	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 The societal Impact of Covid-19 in Japan and Indonesia, Feb 28, 2021	開催年 2021年～2021年

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
バングラデシュ	Dhaka University	Gono Unnayan Prochesta	